八千代町教育委員会発行書第[illegible]

熊野堂古墳

KUMA NO DO MOUNDED TOMB

茨城県結城郡八千代町所在の中世の塚の調査

THE REPORT OF EXCAVATION AT THE "KUMANODO" MOUNDED TOMB IN 1999

1999
八千代町
八千代町教育委員会

八千代町埋蔵文化財調査報告書8

熊野堂古墳

KUMA NO DO MOUNDED TOMB

茨城県結城郡八千代町所在の中世の塚の調査

THE REPORT OF EXCAVATION AT
THE *"KUMANODO"* MOUNDED TOMB IN 1999

1999
八千代町
八千代町教育委員会

熊野堂古墳周辺航空写真（平成9年10月撮影）

序

赤松家のお墓だったと言い伝えられてきた熊野堂古墳が、町の都市計画事業にかかる区画道路建設に伴う記録保存のため、発掘調査の必要に迫られました。日本考古学研究所主任調査員大渕淳志先生の指揮で、昨年10月2日から22日まで発掘調査をしていただきました。その結果、古墳ではなく中世の塚であることが確認されました。

鬼怒の乱流時代に自然の力によってできた塚ではなく、出土品などから室町時代に何かの供養のために造られた塚ではないかと推定されるようです。当初の塚は、発掘時の3倍くらいの大きさをもった塚ではなかったか。

風雨にさらされたり、人為的に削り取られたりしながら、樹木や雑草に覆われて残存したものでありましょう。何のために、このような塚を造られたのだろうかを尋ねるだけでも、考古学の研究に魅せられるものがあります。

お力添えくださいました各位にお礼を申し上げ序文とさせていただきます。

平成11年1月

八千代町教育委員会教育長
坂　入　誠　一

例　言

1．本書は、八千代町都市計画事業にかかる区画道路建設に伴う熊野堂古墳（町番号139）の発掘調査報告書である。

2．熊野堂古墳は、茨城県結城郡八千代町大字若字熊野堂1315－1に所在する。発掘調査面積は、79m²である。

3．発掘調査から報告書作成に至る業務は、八千代町の委託を受け、八千代町教育委員会が主体となり、日本考古学研究所に依頼して実施した。

4．調査期間は、現地調査が平成10年10月2日～平成10年10月22日、整理作業は平成10年12月1日～平成10年12月18日であった。

5．発掘調査事務局等は下記のとおりである。

八千代町教育委員会教育長		坂入誠一
事務局	広瀬　寧	八千代町教育委員会生涯学習課長
	湯本　充一	八千代町教育委員会前生涯学習課長
	秋葉　進	八千代町教育委員会生涯学習課参事
	山野井哲夫	八千代町教育委員会生涯学習課文化係
	佐野　史子	八千代町教育委員会生涯学習課文化係
	山口　道夫	茨城県派遣社会教育主事
調査員	大渕　淳志	日本考古学研究所主任調査研究員
		日本考古学協会会員

6．熊野堂古墳現地調査組織は下記のとおりである。

調査主体者	八千代町教育委員会	
事務局	八千代町教育委員会生涯学習課	
調査担当者	大渕淳志	日本考古学研究所主任調査研究員
		日本考古学協会会員
調査作業員	中山隆光、青谷　好、倉持秀雄、赤浜照子、松田芳男、松田千代、古村久子、太田幸子、飯田節子、名古屋拓磨、千田美津子	

7．本書の執筆及び編集・刊行に際し、次のように分担して業務にあたった。

編集	大渕淳志
執筆	山野井哲夫・小川和博・大渕淳志
遺構図作成・トレース	山野井哲夫・大渕淳志・酒井悦子・大渕由紀子
遺物実測・トレース	小川和博
遺物拓影	小川和博
遺構写真撮影	大渕淳志
遺物写真撮影	大渕淳志

写真図版作成　　大渕淳志・酒井悦子・大渕由紀子

レイアウト　　大渕淳志

8. 本書に使用した地図は下記のとおりである。

Fig.1　大日本帝国参謀本部陸軍測量局作成　1／20，000

Fig.2　八千代町地図　1／25，000

Fig.3　八千代都市計画図　1／10，000

9. 本書中の土層の色調については「新版標準土色帖（小山忠正・竹原英雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し、記載している。

10. 調査にかかる記録類（写真、図面等）及び出土品は、すべて八千代町教育委員会が保管している。

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の関係機関、関係者のご指導、ご協力をいただいた。記して、深く謝意を表わす次第です。（敬称略、順不同）

茨城県教育庁文化課　茨城県県西教育事務所　八千代町都市計画課　JA常総ひかり八千代中央支店、赤松ヨシノ、仲内良忠、赤松　林、大澤秀樹、遠藤啓子、内田　操、小川由男、藤下昌信、宇佐美義春、千田利明、徳生さち子、鑓治文博

目　次

序……八千代町教育委員会教育長　坂入誠一
例言
Ⅰ．調査の経緯と概要 …… 1
　第1節　調査に至るまでの経緯 ……八千代町教育委員会…… 1
　第2節　調査の経緯と概要 ……日本考古学研究所　大渕淳志…… 1
　第3節　調査日誌 ……大渕淳志…… 2
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の遺跡 ……山野井哲夫…… 4
　第1節　遺跡の位置と環境 …… 4
　第2節　周辺の遺跡 …… 5
Ⅲ．遺跡 …… 7
　第1節　遺跡の概要 ……大渕淳志…… 7
　第2節　遺構 ……大渕淳志…… 7
　第3節　遺物 ……日本考古学研究所　小川和博…… 10
Ⅳ．成果と今後の課題 ……大渕淳志…… 14
参考資料……山野井哲夫…… 16

挿図目次

Fig.1　周辺の地形（大日本帝国参謀本文部陸軍測量局　明治16年測量）…… 3
Fig.2　周辺遺跡分布図（1／25，000）…… 5
Fig.3　遺跡の立地 …… 6
Fig.4　熊野堂古墳遺物出土状況図 …… 8
Fig.5　熊野堂古墳出土遺物（1） …… 10
Fig.6　熊野堂古墳出土遺物（2） …… 11
Fig.7　水輪計測点 …… 12
Fig.8　参考　町指定石造五輪塔（若宇向島361所在） …… 13
Fig.9　位牌碑文 …… 16
Fig.10 位牌実測図 …… 16

図面目次

PLAN.1　熊野堂古墳等高線測量図
PLAN.2　熊野堂古墳土層堆積図

図版目次

PL.1　遺跡周辺航空写真（アメリカ合衆国極東空軍　昭和23年撮影）
PL.2　遺跡航空写真（昭和36年撮影）
PL.3　調査前（伐採前）・調査後（伐採後）・土層堆積状況
PL.4　遺物出土状況・遺物出土状況（五輪塔）
PL.5　石造物（水輪）・出土遺物
PL.6　参考資料　赤松祐弁（伝）五輪塔・赤松祐弁（伝）位牌
熊野堂古墳発掘作業参加者（平成10年10月22日撮影）

Ⅰ・調査の経緯と概要

第1節　調査に至るまでの経緯

平成9年4月、八千代町都市計画事業にかかる埋蔵文化財の照会があり、八千代町教育委員会では文献（注）や現地の確認をしたところ、計画地内には熊野堂古墳が所在し、区画道路にかかっていることがわかった。

その後、周辺の開発との調整を図りながら埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進め、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

八千代町教育委員会では、現状の地形測量を行った後、日本考古学研究所に依頼して平成10年10月1日から10月16日の予定で発掘調査を実施することになった。

（八千代町教育委員会）

注）栗山矢尻古墳発掘調査報告書　昭和51年　八千代町教育委員会

第2節　調査の経緯と概要

熊野堂古墳の本調査は平成10年10月2日から開始された。事前に八千代町教育委員会によって作成されていた地形測量（等高線測量）図をもとに、古墳に対して直交する形で、十字に、クロスする様に、土層観察用のベルトを設定する。また、調査区をベルトによって区切って、北西側をA区、北東をB区、南西をC区、南東をD区とした。調査は4分割にした古墳の盛り土をそれぞれの区域ごとに遺物の有無を確認しながら基盤層であるソフトローム層まで精査していった。調査2日目の10月5日に、調査区Cで、五輪塔の一部と思われる石造物が検出された。また、B区においても、陶磁器・カワラケの破片も出土している。各区域ごとの精査がほぼ終了した段階で、残しておいた土層観察用ベルトの土層堆積状況図を実測し、また、土層堆積状況写真を撮影する。次に、この土層観察用ベルトも、遺物の有無を確認しながら、精査し、除去していく。ベルト除去後、残しておいた遺物の出土状況図を実測し、また、出土状況写真を撮影し、各遺物の標高値を測定したうえで、遺物の取り上げ作業を行った。古墳の盛り土除去後に、調査区内の精査を再度行い、古墳造築以前の遺構・遺物の有無を調査した。その結果、検出できなかったため、完掘写真撮影を行い、平成10年10月22日に現地作業を終了している。

五輪塔

現地調査の結果、熊野堂古墳からは、埋葬施設及び、古墳の周溝などの施設が検出されなかったうえに、副葬品と思われる古墳時代に該当する遺物が確認されなかった。また、盛り土下層より、中世の遺物が検出されたことからも、本遺跡の熊野堂古墳は、その名称とは異なり、中世期に造られた塚と考える。

（大渕淳志）

第3節　調査日誌

10.2（金）　熊野堂古墳の現地作業を開始する。重機によって、排土置き場を創設。作業員参加し、地鎮祭を行う。セクションベルトを十字に設定し、北西をA区…南東をD区とする。盛り土の除去精査作業をA・C区より始める。

10.5（月）　前日に引き続き、作業員による人力の盛り土除去作業を行い、C区の撹乱層より五輪塔の一部と思われる石造物が出土する。

10.6（火）　朝からの降雨のため、現地作業を休止とする。

10.7（水）　盛り土の除去精査作業を継続する。（A・C区）

10.8（木）　A・C区の盛り土除去作業を行い、終日にて終了する。午後より、下妻市、岩井市、千代川村各教育委員会来跡する。

10.9（金）　A・C区の清掃を行い、A・C区の土層堆積状況写真撮影及び、土層堆積図実測作業を行う。同時にD区の検出作業も開始する。

10.12（月）　前日に続きD区の検出作業を行う。

10.13（火）　D区の盛り土除去精査作業を継続して行う。遺物は検出できず、現代の撹乱を広く受けている。

10.14（水）　未明からの雨のため、現地作業を終日休止する。

10.15（木）　D区の検出作業を終了し、清掃作業を行い、D区の土層堆積図実測・写真撮影を実施する。

10.16（金）　降雨のため、現地作業休止。

10.19（月）　B区の盛り土除去及び精査作業を始める。

10.20（火）　前日に引き続き、B区の精査作業を行う。

10.21（水）　B区の検出作業を引き続き行う。最下層付近より、カワラケ・陶磁器を出土する。B区の検出作業を終了し、清掃作業・土層堆積状況の写真撮影及び、実測作業を実施する。

10.22（木）　調査区の清掃を行い、遺物出土状況写真を撮影し、遺物出土状況図を実測する。実測終了後に、出土遺物の取り上げ作業を行う。作業終了後に、再度、調査区内の精査を行い、他の遺構のないのを再確認し、完掘写真撮影を実施する。器材の撤去を行い、熊野堂古墳の現地作業を完了する。

Fig.1　周辺の地形（大日本帝国参謀本部陸軍測量局，明治16年測量）　1．熊野盛古墳

Ⅱ．遺跡の位置と周辺の遺跡

第1節　遺跡の位置と環境

八千代町の地形は、結城台地を中心に東側に鬼怒川とその流域沿いの低地及び南側の飯沼低地に大きく分けられる。台地には低地から幾重にも谷津田が深く入り込み、複雑な地形を形成している。このような谷津田を臨む台地上には多くの遺跡が立地している。熊野堂古墳も東側に鬼怒川低地へ続く谷津田、西側に飯沼低地に続く谷津田に挟まれた標高26.5mの台地上に立地している。現状は山林であるが、周囲は畑になっている。

熊野堂古墳は、地形測量を実施したところ、南北13m、東西11m、高さ1.2mの楕円形を呈している。古墳の東側は過去2回（昭和46年及び昭和57年頃）の道路拡幅によってかなり削られており、また地元の方のお話しから高さも現在の2倍以上あったことがわかった。その当時は、頂上には祠が祭られており、盆の時期に供養されていたということである。

熊野堂古墳は、昭和51年に出された報告書（前掲書）に古墳として紹介されているが、周辺からは遺物が全く認められず周溝の痕跡も確認できないことや、地権者である赤松ヨシノ家には代々「赤松家」に関するお墓の跡と伝えられていること等からも、古墳時代のものではないと考えられた。今回の発掘調査で、古墳ではなく、中世の塚であることが判明した。

第2節　周辺の遺跡

熊野堂古墳周辺の遺跡は、鬼怒川低地に面した台地上に立地している。台地には奥深くまで大小の谷津田が入り込み、若沼や太田沼と呼ばれていた。この沼地に面した若・太田と一部菅谷・沼森を含めた地域には、現在10か所の遺跡が確認されている。

集落跡は4遺跡あるが、いずれも弥生時代を除き、縄紋時代から中・近世にかけての遺跡である。西根神遺跡からは、旧石器時代の頁岩製の削器が出土している。若香取遺跡からは、埴輪片が出土していることから、周辺には古墳があったと考えられる。また西中宿遺跡からは、鉄滓が出土している。

古墳では、全長約21mの前方後円墳である若古墳と、昭和62年に発掘調査された太田古墳がある。太田古墳からは箱式石棺が発見され、石棺内から人骨の他、銅鏡、直刀、鉄鏃、刀子、金環、玉類等多くの副葬品が出土した。

城館跡では、南北朝時代の鷲宮砦城跡、戦国時代の若（島）城跡、太田城跡がある。若（島）城跡には、この地を支配した赤松氏がその祖先の祐弁を供養するために建てたと伝えられる五輪塔が残っている。昭和58年に確認調査され、2重の堀に囲まれていたことがわかった。堀内からは、内耳土器やすり鉢が出土した。また、この地域一帯は縄文時代、奈

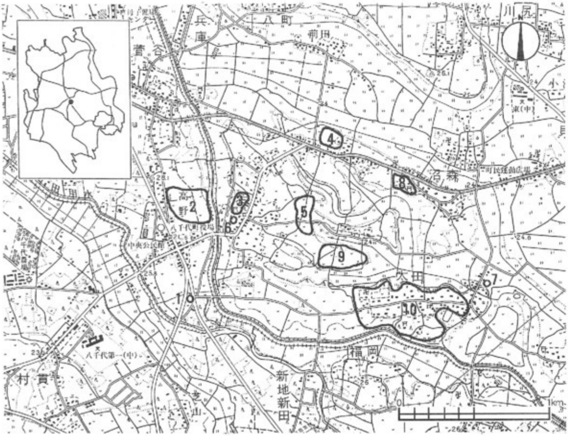


Fig.2 周辺遺跡分布図（1／25，000）

1. 熊野堂古墳　2. 西根曽遺跡　3. 西中宿遺跡　4. 若香取遺跡　5. 二郎宮遺跡
6. 若古墳　7. 太田古墳　8. 鷲宮砦城跡　9. 和歌（島）城跡　10. 太田城跡

＊参考文献

- 八千代町史通史編　昭和63年9月　八千代町史編さん委員会
- 八千代町史資料編Ⅰ（考古）　昭和63年11月　八千代町史編さん委員会
- 和歌（島）城跡確認調査報告書　昭和60年3月　八千代町教育委員会
- 太田古墳発掘調査報告書　平成元年3月　八千代町教育委員会

良・平安時代の遺跡でもある。太田城跡は、現在の太田集落内に当時の堀と土塁が良く残されている。

（山野井哲夫）

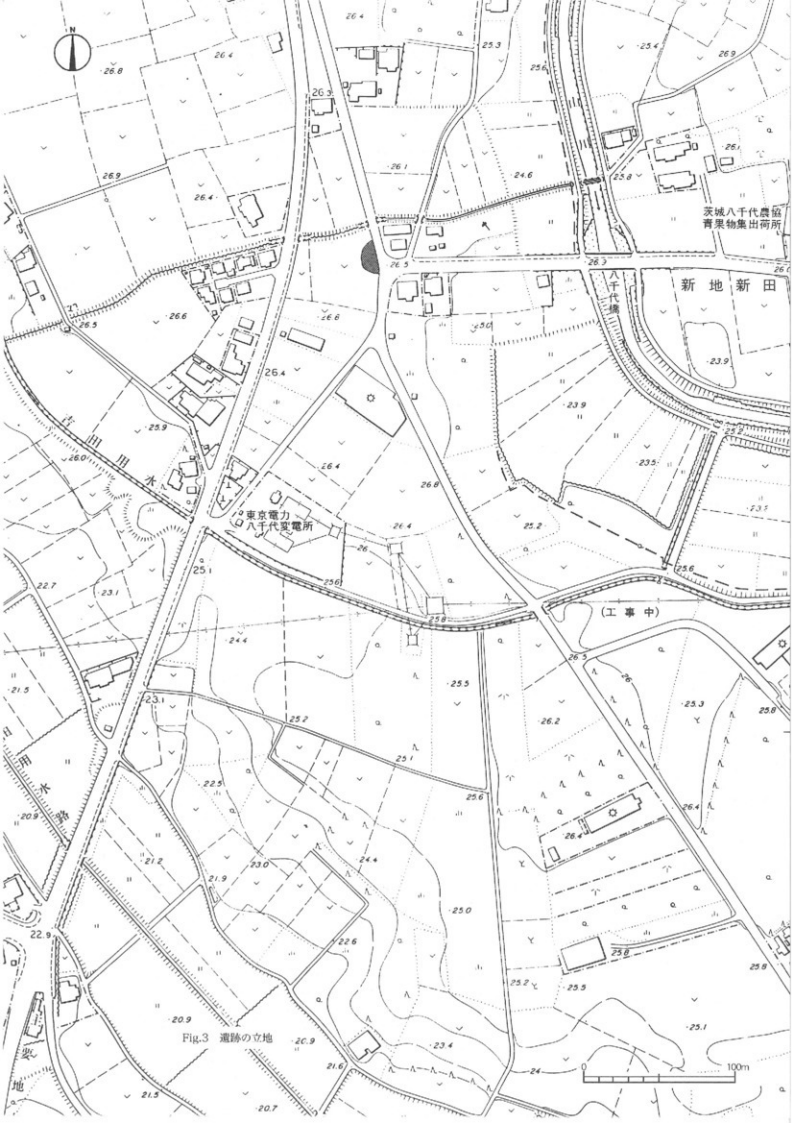


Fig.3 遺跡の立地

Ⅲ. 遺 跡

第1節 遺跡の概要

熊野堂古墳の立地する台地は、東西を2つの谷津によって開析された結城台地の1つである。熊野堂古墳は標高26.50mの台地上に存在し、もっとも近い河川である東側の山川より150mほどの距離に位置している。 山 川

熊野堂古墳は、その名称のとおり、周知の遺跡としては、古墳として知られていたが、今回の調査の結果、中世期に造られた塚であることが判明した。

第2節 遺構 (Fig.4、PLAN.1・2、PL.3・4)

熊野堂古墳は、今回の調査の結果、中世期に造られたと考えられる塚であることがわかったが塚の造設以前に、今回の調査区内では、それ以外の遺構は検出されていなかった。このため、この節では、「熊野堂塚」の記載を中心に述べていく。

塚の調査時点での平面形は、塚裾部での平面形状では、略円形を呈していたものと推定されるが、東側を現在の道路によって、塚裾部の1／4ほどを現在の道路によって壊されていた。塚裾部の大きさは、径13.0mを計測する。現存する塚頂部は、裾部平面形のほぼ中央部にあって、平面形は南北方向に長い略隅丸方形を呈している。その大きさは、南北方向（長軸）が8.0m東西方向（短軸）が4.0mを計る。塚頂部での長軸方向の傾きはN－14° －Wを示している。この塚の現在の最高標高点は、塚裾部のほぼ中央すなわち、塚頂部のほぼ中央にあって、標高値27.670mを計測する。塚の高さは、塚裾部の現地表面からは1.20mを計る。なお、塚頂部はほぼ平坦であり、調査時点では石祠などは祭られていなかった。

調査によって判明したこの塚の盛土は、少なくとも3期にわたって盛られていたことがわかった。最も古い時期を第Ⅰ期とし、Fig.4・PLAN.2の第3～11、20・21層に当たり、カワラケ・陶磁器・鉄製品などの遺物はこれらの層より検出されていて、中世期に盛られた土層と考えられる。次に、第Ⅱ期に当てはまるのが、Fig.4・PLAN.2の第2・12～17層となり、これらの層からは、ビールやジュースのガラス瓶やプラスチックの破片などが検出されている。また、五輪塔の一部と考えられる石造物もこれらの層より検出されている。最も新しい第Ⅲ層は、Fig.4・PLAN.2の第1層に当たり、平成9年の工事の際に盛られていることが判明している。盛土の厚さは、第Ⅰ期の中世期が現存していたものだけで、最大1.20mを計る。第Ⅱ期の厚さは最大で1mを計測している。また、第Ⅲ期の平成9年の盛土の厚さは最も厚い部分で70cmを計る。出土遺物は、No.1が第13層中より、No.2・3・7が第6層中より、No.4～6は（透影図の関係で第2層中となっているが）第7層中より検出されている。 盛 土

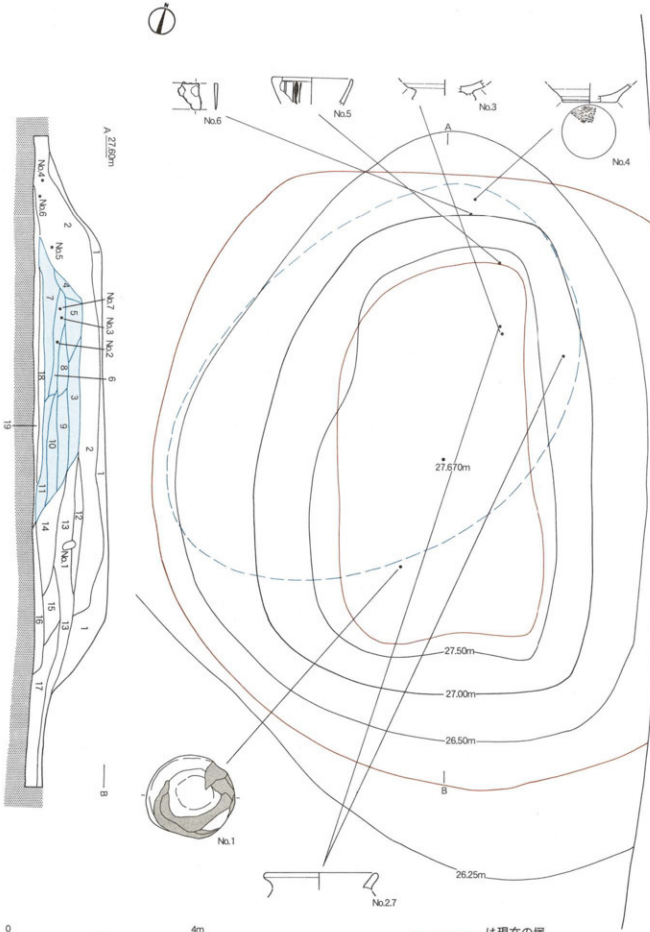


Fig.4　熊野堂古墳遺物出土状況図

次に塚の盛土は、第Ⅰ～第Ⅲ期までで19層に分けられた。以下は各層ごとの層序の記載である。

第1層　明黄褐色土(10YR5/8) 多量のローム粒・ロームブロックを含む。(平成9年の盛土)

第2層　灰黄褐色土(10YR5/2) 多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)

第3層　にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第4層　にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第5層　黄褐色土(10YR5/6) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第6層　褐色土(10YR4/4) 少量のローム粒、多量のロームブロックを斑状に含む。(中世の盛土)

第7層　にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のローム粒を含む。(中世の盛土)

第8層　明黄褐色土(10YR6/6) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第9層　にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第10層　灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第11層　暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)

第12層　にぶい黄褐色土(10YR5/3) 多量のローム粒を含む。(昭和の盛土)

第13層　にぶい黄褐色土(10YR5/3) 多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)

第14層　褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒、プラスチックを含む。(昭和の盛土)

第15層　黄褐色土(10YR5/6) 多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)

第16層　にぶい黄褐色土(10YR5/4) 多量のローム粒を含む。(昭和の盛土)

第17層　灰黄褐色土(10YR5/4) 多量のローム粒、ビニールを含む。(昭和の盛土)

第18層　黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒を含む。(塚築造以前の自然堆積土)

第19層　黄褐色土(10YR5/6) ローム漸移層。(塚築造以前の自然堆積土)

第20層　褐色土(10YR4/6) 多量のローム粒・ロームブロックを斑状に含む。(中世の盛土)

第21層　黒褐色土(10YR2/2) 多量のローム粒・ロームブロックを含む。(中世の盛土)

(大澤淳志)

第3節 遺物 (Fig.5～Fig.8、PL.5)

今回の調査では、塚の盛土である覆土中より縄紋土器及び古代から近世にかけての土師器・土師質土器(カワラケ)・磁器・鉄製品・石造物が出土した。しかし、その出土点数はわずか8点に過ぎず、しかも石造物である五輪塔(組合せ式)の一部である「水輪」を除きいずれも小破片で器面の摩耗や欠損が著しく、図示したすべての遺物は復元実測である。したがって、所属時期を明確にするものが少ないことをあらかじめ明記しておきたい。

1. 縄紋土器 (Fig.5－1)

1点のみ、覆土中より出土している。わずか2cm角の深鉢胴部小破片である。紋様は1本の沈線紋が垂下しているが、他の意匠紋は確認できない。内面は丁寧な磨きが施されている。焼成は普通で、胎土に石英・長石・角閃石粒を含み、色調は黄橙色(7.5YR7/8)を呈する。

中 期 中期・加曽利E2式土器である。

2. 土師器 (Fig.5－2・3)

土師器と思われる破片が3点、覆土中より出土している。2は甕の口縁部破片で、2点あり接合はしないが同一個体であろう。約1/10程を残存する。

法 量 法量は推定口径12.2cm、現存高1.9cmを測る。口縁部は短く「く」の字状に外反する。体部の形状は不明。口縁部内外面とも横ナデ整形が施されている。焼成は良好で堅緻である。胎土に石英・長石・角閃石粒を比較的多く含有する。色調は浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。3は高台付坏の底部付近の破片である。約1/6程を残存し、現存する法量は現存高1.6cm、現存最大径9.4cm、底径

高 台 6.2cmを測る。ロクロ成形で、高台部は欠損し、その形状は不明であるが、「ハ」の字状に開く貼付である。また体部は大きく外方へ開く。底部周縁は回転ヘラ削り。底部切り離し技法は不明であるが、高台貼付部は回転ナデ整形、坏部内面はナデ整形で仕上げられてい

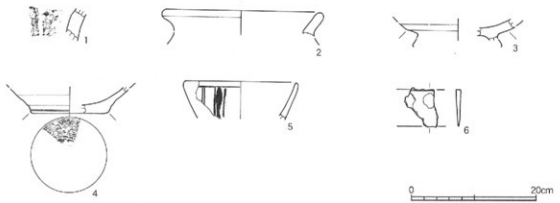


Fig.5 熊野堂古墳出土遺物 (1)

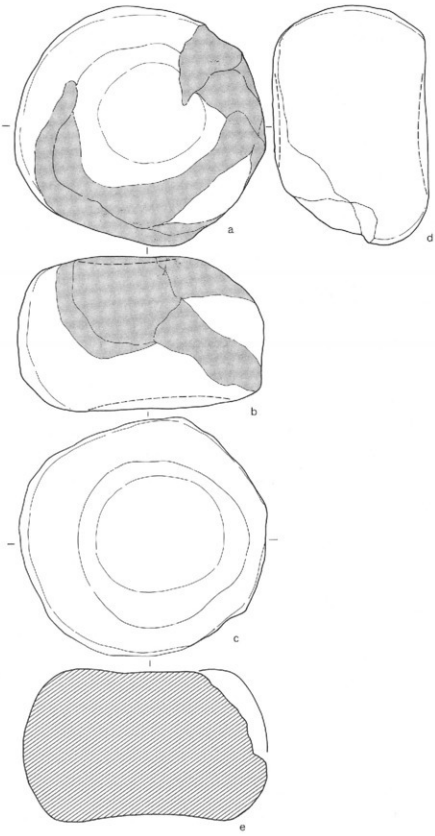
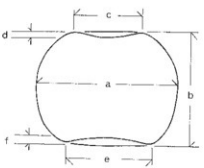


Fig.6 熊野堂古墳出土遺物 (2)

る。胎土に石英・長石・角閃石粒を比較的多く含有する。色調は浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。



a=25.33cm　b=16.33cm　c=19.80cm
d=0.40cm　e=15.20cm　f=0.72cm

Fig.7　水輪計測点

3. 土師質土器 (Fig.5－4)

いわゆる「カワラケ」と呼称されるもので、底部付近の破片である。約1/6程度を遺存し、現存する法量は現存高1.9cm、底径6.0cmを測る。ロクロ成形で、回転糸切り　底部は回転糸切りである。器形は底部周縁が肥厚し、一旦短く垂直気味に立ち上がり、体部が大きく開く。底部周縁は整形されていないが、体部は比較的丁寧なナデ整形が施され、明瞭な稜をもっている。胎土に石英・長石・角閃石粒を含有する。色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

4. 磁器 (Fig.5－5)

磁器として碗の口縁部破片が出土している。約1/8程を残存する。現存する法量は口径丸形碗　9.0cm、現存高3.0cmを測る小碗に分類される。ロクロ成形で、形状は底部から内湾気味に外傾して開く丸形を呈する。染付・透明の釉薬で、紋様は縦縞紋様である。胎土は白で、製作は19世紀の瀬戸・美濃系である。

5. 金属製品 (Fig.5－6)

金属製品として残存はわずか2cm程の板状の鉄破片がやはり盛土中から出土している。本品は依存する周辺部に関と思われる肥厚部分が観察されることから小刀もしくは小柄といった刀部の破片として扱った。また全体に錆化が著しいものの、芯部における鉄地の遺存状態は良好で、刃幅2.84cm、関幅0.3cmを計測可能である。なお、刀部の造りとしては鍛造は粗悪で、関幅も薄く実戦用の武器として使用されていたものか疑問である。あるいは祭司用の擬刀であったかも知れない。

6. 石造物 (Fig.6～Fig.8)

組み合わせ式の五輪塔の一部が出土している。いわゆる五輪塔は空輪、風輪、火輪、水輪、地輪の五部分から構成され、その各部の形態は、一般に上から宝珠を団形、請花を半円形、笠を三角形、塔身を円形、基礎は方形を呈し、基礎の下に台座を伴うものもある。水　輪　ここでは水輪である塔身のみ1点が検出された。一部欠損部分も認められるが、ほぼ原形

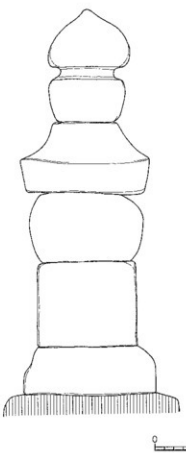


Fig.8　参考：町指定石造五輪塔（若字向島361所在）

を保っているものと考えられる。その形状は偏平な円形で、上下端偏平面には凹部面が整形されている。法量はFig.7で示したように計測した。最大径（＝a）25.33cm、高さ（＝b）16.33cm、上端面径（＝c）19.8cm、上端面凹部深さ（＝d）0.40cm、下端面径（＝e）15.20cm、下端面凹部深さ（＝f）0.72cmを測る。水輪部分としては比較的丁寧に造作され、とくに上・下端面凹部の成形は入念である。石材は花崗岩を使用している。造立年代はFig.8の参考資料に提示した町指定文化財である和歌城跡内に所在する「石造五輪塔」とほぼ同じ室町時代と考えられる。

法　量

造立年代

参考資料：Fig.8に図示した五輪塔は八千代町指定文化財である「石造五輪塔（所在地・八千代町大字若字向島361）」である。五輪塔の本体の高さは164cmを測り、無銘で、造立年代は室町時代後期とされている。

（小川和博）

Ⅳ．成果と今後の課題

本文中にこれまで述べられてきた発掘作業及び、その後の整理作業の成果をもとに、熊野堂古墳と呼ばれていた中世期に造られたと思われる“熊野堂塚”について、本章では、成果としてまとめを試みてみたい。

“熊野堂塚”は、地権者である赤松ヨシノ氏の家においては、代々「赤松家」に関係するお墓の跡であったと伝え言われてきた。この赤松ヨシノ氏の御自宅には、その祖先と伝えられる、赤松祐弁の位牌がある。また、赤松家と関連する城跡として、太田城及び和歌（島）城がある。この和歌（島）城には、祖先である赤松祐弁を祀ったものと伝えられる五輪塔が、赤松氏の本貫とする川尻の地とともに、島の地においても立てられている。なお、川尻不動院墓地には、江戸時代末期に、赤松新右衛門正門正範によって、先祖の供養のために刻した「祐弁墓碑銘」がある。これらの祐弁と伝えられしものはすべて、川尻の赤松家の祖が、足利尊氏に重きをおかれた重臣の一人赤松祐弁（1340～1409年）がその祖であると伝えられていることによる。

赤松祐弁

これらのことからも、川尻の赤松家が14世紀ないし15世紀以降の中世期に、この地にあったことは間違いないものと考えられ、これは“熊野堂塚”の最下層の近くの盛土中より検出された遺物からも中世期に造られていることからも推定される。

次に発掘調査によって判明した中世期に造られた“熊野堂塚”の現在に至るまでのその後について述べる。現在に残っていた“熊野堂塚”は、その東側の1/4ほどを現在の道路によって削平された形で残っていた。現存する高さは、現地表面から約1.2mほどの高さを有していたが、地元の方々からの聞き取り調査によれば、昭和20年代ないし、昭和30年代では、その塚の高さは現在の2倍以上はあったといい、その塚頂部では、現在は何も存在しないが、その当時には石の祠があって、お盆の時期などはお供え物などがあげられていたという。また、八千代町に残る文書等によれば、昭和46年及び、昭和57年の道路拡幅工事によってかなりの部分が削られたという。これは発掘調査時の盛土の観察からも、中世期の盛土が残存していたのは、現存の塚の中心部の北側を中心に、大きさ10m×6.8mの楕円形を呈し、厚さ15cm～120cmを計り、残っていたことからもわかる。この中世期の盛土の上に、昭和期に盛られた土が20～100cmの厚さで検出されていた。また、昭和23年及び昭和36年の航空写真でも、道路によって削平されていたことがわかる。これらのことから、中世期に造られた“熊野堂塚”は、昭和23年以前の昭和期に、道路の拡張によって壊され、その後も道路の拡幅の度に壊され、削られた中世の盛土の上に、お墓と伝えられていた塚を壊さないためとして、削った土をその度に盛っていったものと考えられる。この昭和期の塚の造成の際に、もともと塚頂部にあった五輪等の一部が、盛った土とともに混じって

しまい、他の五輪塔の大部分は、他にあったと伝えられる石祠と共に、他の場所に移されているものと推定されるが、どの場所に移されていたのかも、地元の方々の記憶の中でも定かではない。

また、検出された五輪塔の一部（水輪）が、その成形方法からも比較的古いものと考えられるうえに、赤松家が室町時代に、川尻及び島の地に建てていることからも、この“熊野堂塚”も、現在の赤松家に言い伝わる赤松家の関連するお墓というよりは、室町時代に建立された赤松家の祖先（他の五輪塔と同じ意味を持つものならば、その祖、赤松祐弁）を祀る慰霊のために造られた塚であった可能性が高い。それが後世になって、赤松家に関するお墓と伝わっていき、昭和になってからの道路の拡幅の度に塚が削られていっても、その度に、低くなっていったとしても、削った土を盛って塚として復元していたのも、お墓と伝えられていたためなのであろう。

以上、小筆でまとまりがない文であったが、小結としたい。

（大渕淳志）

参考・引用文献

八千代町史編さん委員会編『八千代町史（通史編）』1987年

八千代町教育委員会『和歌（島）城跡確認調査報告書』1985年

八千代町教育委員会『栗山矢尻古墳発掘調査報告書』1976年

参考資料

赤松ヨシノ家に伝わる位牌

この位牌は、熊野堂古墳の地権者である赤松ヨシノ家に伝えられてきた位牌である。今回、発掘調査に関連して見せていただきご本人のご了解を得たので、ここに紹介することにした。

位牌は、高さ42.8cm、幅9.0cmで蓮台を含めた高さは55.8cmである。全体に黒漆が塗られている。

碑文は、表に「持寶寺権律師祐辨　覺位」その上部に梵字の「ア」と彫られている。裏には、祐弁の碑（注1）や石塔（注2）があること、応永16年正月27日に他界したこと等が刻まれている。

（山野井　哲夫）

注1）川尻不動院の墓地に祐弁墓碑がある。

注2）和歌（島）城跡に五輪塔がある。

（表）

持寶寺権律師祐辨　覺位

（裏）

赤松満範之二男寿八十九有碑於川尻郷不動院又當邑向嶋舘有石塔
往書川尻村不動尊膝下日广永十六年己丑正月九七日刀刻祐弁他界
開山祐弁等伝伝

Fig.9　位牌碑文

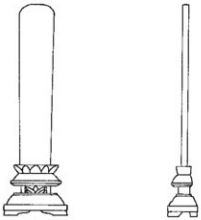
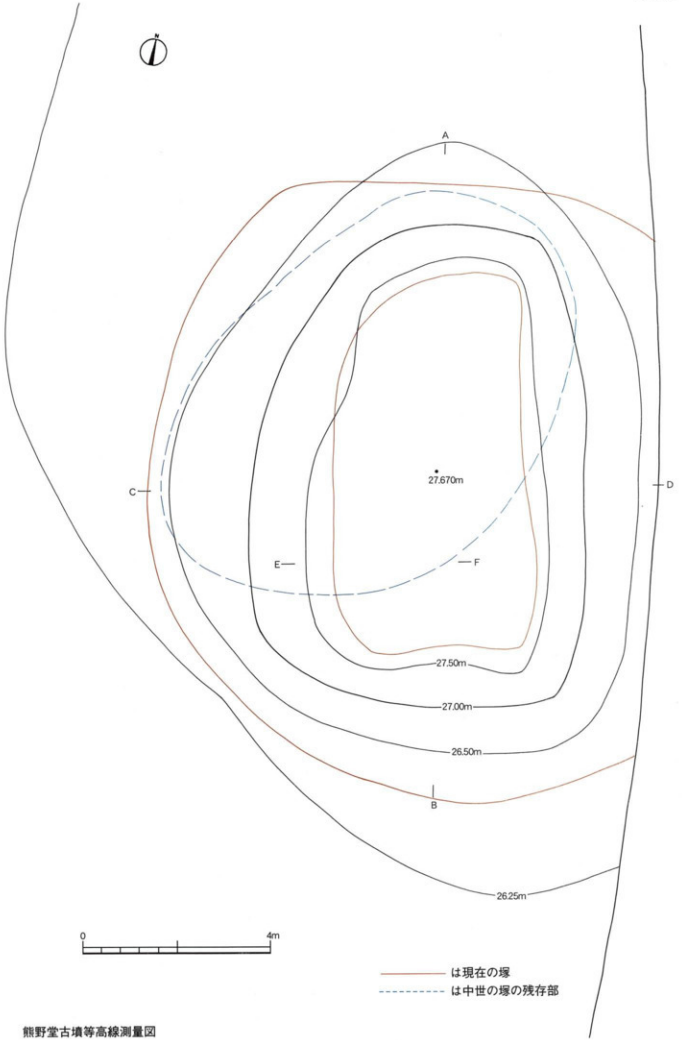
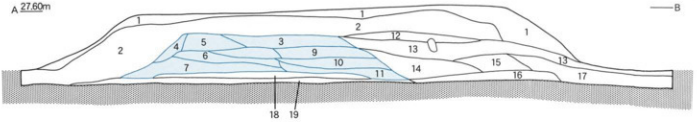


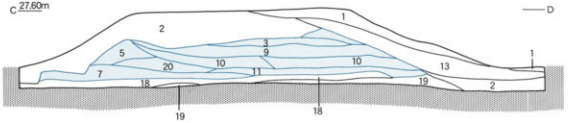
Fig.10　位牌実測図

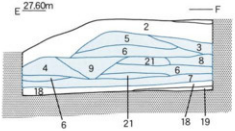
図面・図版



熊野堂古墳等高線測量図



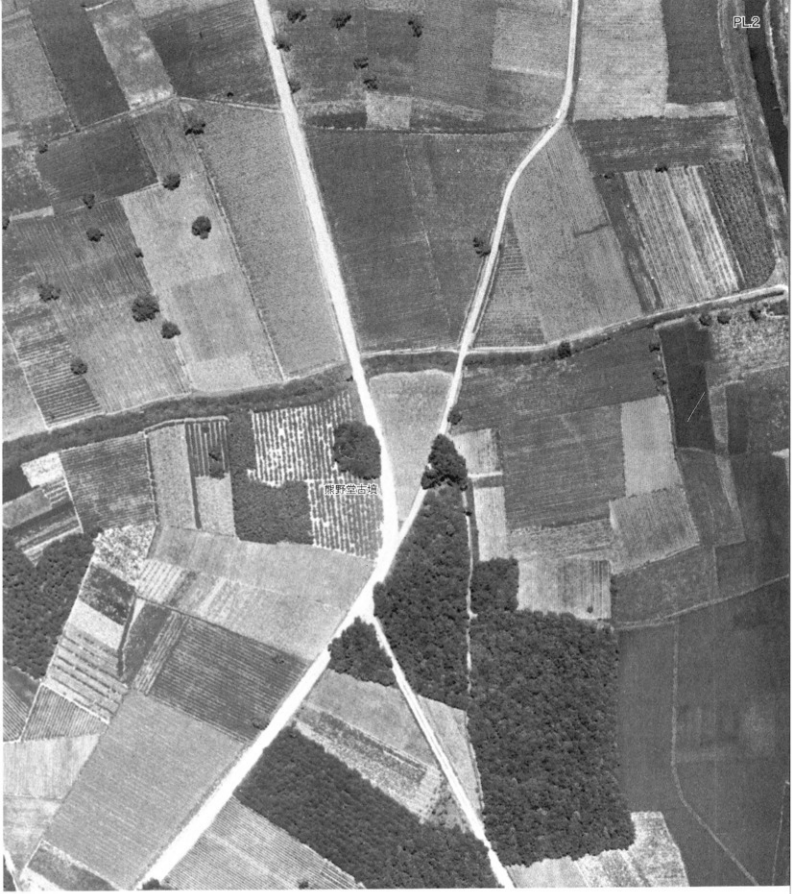




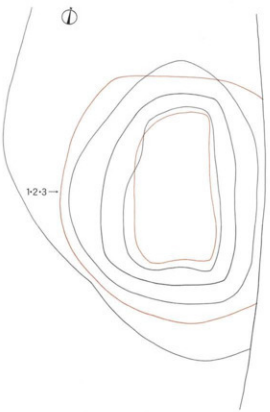
1. 明黄褐色土　10YR5/8　多量のローム粒・ロームブロックを含む。(平成9年の盛土)
2. 灰黄褐色土　10YR5/2　多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)
3. にぶい黄褐色土　10YR5/4　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
4. にぶい黄褐色土　10YR5/4　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
5. 黄褐色土　10YR5/6　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
6. 褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、多量のロームブロックを斑状に含む。(中世の盛土)
7. にぶい黄褐色土　10YR5/4　少量のローム粒を含む。(中世の盛土)
8. 明黄褐色土　10YR6/6　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む (中世の盛土)
9. にぶい黄褐色土　10YR4/3　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
10. 灰黄褐色土　10YR4/2　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
11. 暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む。(中世の盛土)
12. にぶい黄褐色土　10YR5/3　多量のローム粒を含む。(昭和の盛土)
13. にぶい黄褐色土　10YR5/3　多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)
14. 褐色土　1YR4/4　多量のローム粒、プラスチックを含む。(昭和の盛土)
15. 黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒・ロームブロックを含む。(昭和の盛土)
16. にぶい黄褐色土　10YR5/4　多量のローム粒を含む。(昭和の盛土)
17. 灰黄褐色土　10YR5/4　多量のローム粒、ビニールを含む。(昭和の盛土)
18. 黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む。(自然堆積土)
19. 黄褐色土　10YR5/6　ローム層の漸移層。(自然堆積土)
20. 褐色土　10YR4/6　多量のローム粒・ロームブロックを斑状に含む。(中世の盛土)
21. 黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒・ロームブロックを含む。(中世の盛土)

熊野堂古墳土層堆積図

遺跡周辺航空写真（アメリカ合衆国極東空軍　昭和23年撮影）



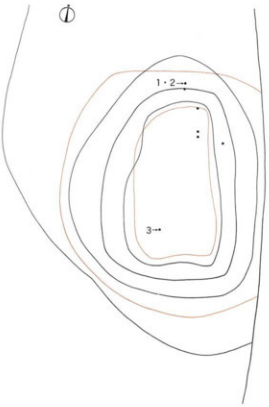
遺跡航空写真（昭和36年撮影）


Φ
1·2·3→

1.調査前
（伐採前）

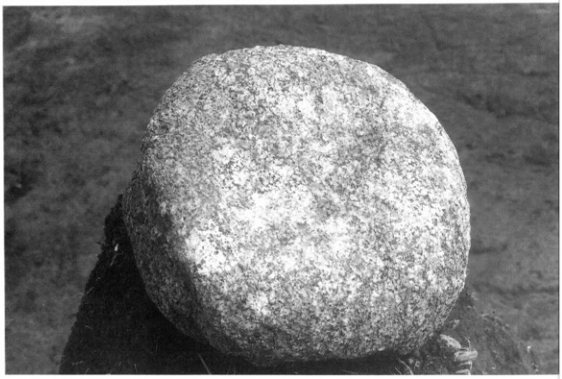
2.調査前
（伐採後）

3.土層堆積
状況


1・2→
3→

1.遺物出土状況

2.遺物出土状況



3.遺物出土状況
（五輪塔）

a

b

c

1.石造物（水輪）

1　2　2　3

4　5　6

2.出土遺物

1.赤松祐弁（伝）五輪塔

2・3.赤松祐弁（伝）位牌▲▶

熊野堂古墳発掘作業参加者（平成10年10月22日撮影）

報告書抄録

ふりがな	くまのどうこふん
書名	熊野堂古墳
副書名	茨城県結城郡八千代町所在の中世の塚の調査
巻次	8
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書
編著者名	山野井哲夫・小川和博・大湖淳志
編集機関	八千代町教育委員会
発行機関	八千代町・八千代町教育委員会
所在地	〒300－0592　茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170
発行年月日	西暦1999（平成11）年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
熊野堂古墳（くまのどうこふん）	茨城県結城郡（いばらきけんゆうきぐん）八千代町（やちよまち）大字菅谷（おおあざすげや）1170	08521	139	36度10分25秒	139度53分48秒	19981002〜19981022	79	八千代町都市計画事業にかかる区画道路建設に伴う調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚	中世	塚	縄紋土器 土師器 カワラケ 陶磁器 鉄製品 石造物	

熊野堂古墳

——茨城県結城郡八千代町所在の中世の塚の調査——

平成11年3月25日　印刷
平成11年3月31日　発行

発行　八千代町・八千代町教育委員会
茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170　TEL　0296-48-0525

編集　八千代町教育委員会
日本考古学研究所
千葉県佐倉市川崎170-8　TEL　043-485-8381(代)

印刷　有限会社　田辺印刷
千葉県印旛郡印旛村荻谷663-4　TEL　0470-86-2298